

中央アメリカ、ニカラグア共和国マナグア湖畔の考古学調査

Archaeological Investigations on the Shores of Lake Managua, Nicaragua

長谷川 悦 夫

Etsuo HASEGAWA

1. ニカラグアについて

1-1. ニカラグア概観

ニカラグア共和国は中央アメリカ地峡に位置する。北はホンジュラス、南はコスタリカと国境を接し、東はカリブ海、西は太平洋に面する。中央アメリカ諸国では最も面積が大きく、約 13 万平方キロメートル、人口は約 617 万人（2014 年、世銀）である。主要産業は農牧業であり、主要輸出品は、コーヒー豆、牛肉、金、砂糖である（外務省 2015）。

1-2. メソアメリカとニカラグア

「メソアメリカ」とよばれる地域は、メキシコ中南部から中米地峡にまたがる（図 1）。この地域には、スペイン人到来時に、ピラミッド建造物、トウモロコシ農耕、260 日暦と 365 日暦およびそれらの組み合わせ、黒曜石の石刃石器の製作などの文化要素が共有されていた。また、メソアメリカは、マヤ、アステカなどの古代文明が興亡した舞台でもあり、南米大陸のアンデス地域と並んで、先スペイン期アメリカ大陸の二つの高文明地域（核アメリカ）を形成する。

ニカラグア太平洋岸は、コスタリカ北西部とともに、メソアメリカ東南部を形成するとされ

る。この両地域をあわせ「ニコヤ文化圏」（Greater Nicoya Subarea）と呼ばれる（図 1）。スペイン人到来時、このニコヤ文化圏には、メソアメリカ系民族集団であるオトマンゲ語族の Chorotega（Chorotega）とユト・アステカ語族の Nicaraos（Nicaraos）が居住していた。ただし、これらの民族集団がニカラグア太平洋岸とコスタリカ北西部へ移住したのは、先スペイン期の比較的遅い時代、メソアメリカの編年で言う古典期終末期（AD800-900）から後古典期（AD900-1520）における出来事と考えられている（Abel-Vidor 1981; Fowler 1989: 14-49; Newson 1987: 26-33）。



図1 メソアメリカとニコヤ文化圏

* はせがわ・えつお
埼玉大学教育機構非常勤講師

1-3. ニカラグア考古学史

ニカラグアの先スペイン期の遺跡や遺物に関心が寄せられたのは意外と早い時期であり19世紀スクワイヤーが自然、民俗、考古学遺跡の観察を含めた優れた旅行記を残し(Squier 1852)、今世紀初めにはロスロップがコスタリカ、ニカラグアで調査を行い、主として土器を扱った大著の報告書が残されている(Lothrop 1926)。1930年代から1960年代は、ニカラグアでは3代にわたるソモサ父子の政権下にあたる。1929年の世界恐慌から第二次大戦が終わってしばらくは、中南米全域で考古学の調査研究は低調であった。政治経済的に見れば、1960年代までのニカラグアは当時中央アメリカで最も豊かな国として、独裁政権下ながらも安定を保っていた。しかしながら、この時期のニカラグアにおける考古学の調査研究は少なく、今日までも重要性をもつ成果も散見されるものの、北のメキシコ、グアテマラなどでの第二次大戦後の調査研究の進展には比べようもなかった。

1972年の大地震で首都マナグアが壊滅する。以後、独裁体制への反抗と武装蜂起、革命戦争を経て、社会主義政党であるFSLN(サンディニスタ民族解放戦線)が政権を取り、1980年代のアメリカ合衆国による経済封鎖と国内を二分する内戦が終結するまでの間は、この国が荒廃し、最貧国へと転落する過程だった。そして、このような状況で考古学調査が大きく進展することもなかった。

1990年の選挙と親米政権成立以降、内戦も終結し、ニカラグアは安定へと向かった。首都マナグアでの開発工事の増加から考古学調査の件数も増加した。1995年から97年にかけて、

マナグア首都考古学プロジェクト(Proyecto Arqueologico de la zona metropolitana de Managua)が行われ、著者もこれに参加する機会を得た(Hasegawa 1998; 長谷川 1999)。

2000年代に入り、再びFSLNが政権の座に着くが、冷戦ただ中の1980年代とは違って、今日ではニカラグアとアメリカ合衆国との経済関係は維持されており、移民などの面でも両国のつながりは強い。このようななか、米国の研究者もニカラグアでの考古学研究に従事しており、考古学調査の件数は着実に増えている。また実施地域も、太平洋岸地域に限らず、かつてはほとんど手つかずだった内陸地域やカリブ海岸地域にも広がっている。現在、中国系企業HKND(香港ニカラグア運河開発投資会社)がパナマ運河に次ぐ太平洋と大西洋をつなぐ第二の運河建設計画を進めており、2014年には、カリブ海からサン・フアン川を遡り、ニカラグア湖を経て、リバス地峡を貫く運河ルートが発表された。これにともない建設ルートの兩岸幅5キロにわたって踏査がなされ、213の考古学的遺跡が登録され、1万4000点以上の遺物が回収された(HKND 2015)。

著者は、2013年3月にニカラグアでの考古学調査を再開し、ニカラグア太平洋岸地域の先スペイン期遺跡の踏査とマナグア湖畔に所在する2つの遺跡での試掘調査を行った。2012-13年度は科研費プロジェクト「環太平洋の環境文明史」、2014-15年度は同「古代アメリカの比較文明論」の研究分担者としてこの研究に従事している。現地調査を再開して日は浅く、未だ予備的な内容ではあるが、上記2遺跡の発掘調査と、その他、ニカラグア太平洋岸における近年の考古学調査によって現在まで得られ

た知見をまとめ、当該地域の先スペイン期の諸問題について考えてみたい。

2. 近年のマナグア湖畔の考古学調査

ここでは、自身で発掘したチラマティーヨ遺跡、ラ・パス・イ・レコンシリアシオン遺跡の調査結果の概要と、その他のマナグア湖畔における近年の考古学調査について概観して、そこから得られた知見をまとめる。

2-1. チラマティーヨ

チラマティーヨ遺跡(Chilamatillo)は、ニカラグアの首都マナグアから北へ約 31km、ティピタパ市に所在する(図 2)。マナグア湖の湖岸から、7メートルほどの高さの台地上にかけて、土器や石器など大量の遺物が地表面に散乱している。以前から、ときおり埋葬用とみられる

大型の甕形土器が発見される遺跡として地元住民には知られていた。筆者は、2014 年 8 月に初めてこの遺跡を訪れ、文化庁、ティピタパ市、土地所有者の許可が得られたことから、土器と炭化物のサンプルを採取する目的で同年 9 月に 10 日間にわたり試掘調査を行った(Hasegawa 2015)。

上記の台地上に 2 メートル四方の試掘坑を 1 カ所発掘した(図 3)。この場所では、非常に緩やかであるが地表面の盛り上がりが見られ、土中に埋もれた建築が見つかることも期待された。しかし発掘の結果、建築構造は全く確認されず、この盛り上がりは自然に形成された地形と考えられる。遺物包含層は地表下約 1 メートルまでである。計 3741 点の土器片と多数の石器を回収した。また、魚類の骨、貝殻などが出土した。



図2 ニカラグア太平洋岸の諸遺跡

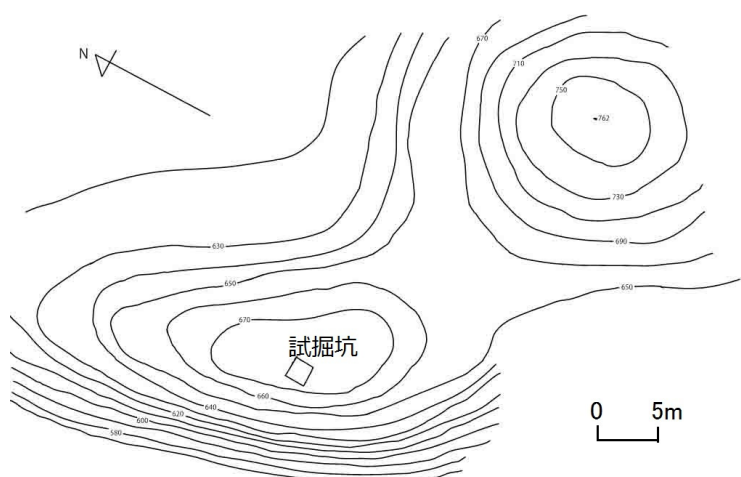


図3 チラマティーヨ遺跡



写真1 チラマティーヨ遺跡出土、サポア期・オメテペ期の彩色土器

この土器片を分析した結果、1598点が既知の土器型式に分類された。年代的には、テンピスケ期からオメテペ期(400BC-AD1550)までの土器が出土しているが、サポア期(AD800-1350)の土器が519点(土器型式が同定された破片数の32.5%)、オメテペ期(AD1350-1550)の土器が1032点(同64.6%)で大部分を占めている(写真1)。また、土器

型式は同定できないが、特徴的な遺物として両側に挟りが入った土器片が数多く発見された(写真2)。漁労の際に用いられた網または釣り糸に付ける錘であると考えられる。

そして、この遺跡から出土する石器は量も多く、石材も多様である(写真3)。玄武岩が大多数であるが、チャート、石英、玉髄、そしてごくわずかながら黒曜石製の石器も含

まれる。



写真2 チラマティーヨ遺跡出土、挟りが入った土器片



写真3 チラマティーヨ遺跡出土石器

以上から、この遺跡にはサポア期以降の人間居住があったと言える。魚骨、貝殻や錘として用いられたと思われる再加工の土器片が多く見つかることから、漁労に大きく依存していた生活様式がうかがえる。不定形の剥片も数多くみられ、石器の製作が行われていた可能性も推測できる。

2-2. ラ・パス・イ・レコンシリアシオン(ラ・パス)

ラ・パス・イ・レコンシリアシオン遺跡(La Paz y Reconciliacion)は、首都マナグアから北西へ約 5km、マテアレ市に所在する(図 2)。マナグア湖の湖岸に所在し、特筆すべきものとして高さ約 3 メートルのマウンド(写真 4)や環状列石が残存している。ニカラグア太平洋岸では、このように地表面からある程度の高さを持った先スペイン期の建築が残っている遺跡は

例外的である。



写真4 ラ・パス遺跡、マウンド

この遺跡はごく最近になってその存在が知られるようになった。「ラ・パス・イ・レコンシリアシオン」という遺跡名はスペイン語で「平和と和解」という意味であり、当該遺跡からほど近くに造られた住宅地の名前から取った。10 年ものあいだ国内が二分して戦ったニカラグア内戦後の、国民統合を希求する雰囲気を表した名称であるが、本稿では以後「ラ・パス」と略記する。

マナグア湖の湖岸に沿って、広範囲にわたり土器、石器などの遺物が地表面に観察される。当該遺跡は複数の私有地にまたがっており、所有者と連絡が取れずまだ立ち入り許可が得られていない部分があるので、遺跡の全体像はつかめていない。

筆者は 2013 年 8 月に初めてこの遺跡を訪れた。マウンドの存在という重要性に鑑み調査許可の申請を続けてきたが、2015 年 9 月によりやく測量調査とトレンチ発掘に着手することができた。時間的制約のなかで調査は 10 日間だけとなり、次年度以降に継続される予定である。

測量の結果、当該マウンドは直径約 20 メートル、高さ 2.8 メートルと判明した(図 4)。このマウンドの西側斜面に 1×8 メートルのトレ

ンチを設定して、建築構造の調査を試みた。マウンド外周部の地表下約 80cm の深さに床と思われる面を検出した(写真 5)。おそらく、これが建築面であると考えられる。いまだ落石に覆われた状態であるが、この面にのっている土留め壁と見られる石の並びが観察される。石はすべて加工されていない自然石である。マウンドの高さから考えて、これは一段目の土留め壁であり、上部には二段目あるいは三段目の土留め壁をもつ階段構造の建造物ではないかと思われるが、いまだ判然としない。

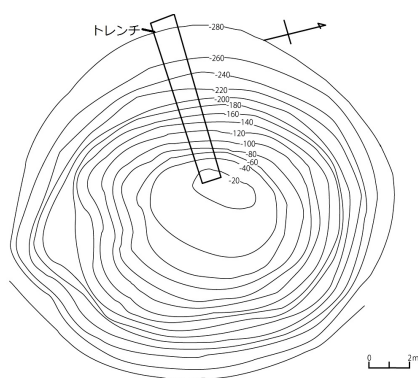


図4 ラ・パス遺跡マウンド平面図

このトレンチ発掘で、土器片、石器が出土している。出土している土器から見て、この遺跡にサポア期からオメテペ期の居住があったことは間違いない。よって、当該マウンドもこの時期に建設されたものと考えられる。なお、この調査の最中、マウンドから約 200m 離れた湖の波打ち際近くから偶然埋葬が発見され、土器と人骨を回収した。

いまだ発掘面積が小さく、確たることは言えないが、この遺跡では大規模な建築の痕跡はあるものの、土器の出土量は上記のチラマティーヨ遺跡に比べれば比較的少ない。また、動物骨や炭などの食料調理の痕跡も、今のところ確認



写真5 ラ・パス遺跡マウンド、床面の検出

されていない。

2-3. オロ・ベルデ

オロ・ベルデ遺跡(Oro Verde)は、マナグアの北西、シウダー・サンディノ市に所在する(図 2)。所在する市は異なるが、ラ・パス遺跡とは近距離である。この地域では、住宅地の敷地から頻繁に先スペイン期の埋葬が発見される。その中でも、最大規模のものが 2010 年に発掘された。以下、報告書(Zambrana 2013)から発掘について概観する。

発掘されたのは 12 平方メートルであり、計 10 の甕棺が出土した。地表下約 1 メートル前後で出土しており、まず 7 個の甕棺が 2 列(3 個、4 個でそれぞれ 1 列)で南北に列をなして出土

し(写真 6)、それよりもやや深い位置でさらに 3 つの甕棺が発見されている。大きな壺形あるいは靴形の土器に洗骨後の人骨が土器に納められた二次埋葬である。しばしば、彩色土器が甕棺の蓋または副葬品として用いられている。



写真6 オロ・ベルデ遺跡

さらに、これらの甕棺よりもやや深い位置から伸展葬で直葬された人骨が出土している。他にも埋葬人骨らしき骨が見つかったが、保存状態が非常に悪く、発掘は断念されたという。

この伸展葬の直葬という埋葬の様態はバガセス期に多いものだが、土器も伴わず、放射性炭素(C14)年代測定もされていない状況で、結論は保留される。甕棺墓について言えば、甕棺、蓋、副葬品である土器は、すべてサポア期からオメテペ期の土器である。

発掘面積が限られており、この遺跡は周囲に広がるさらに大規模な集団墓の一部である可能性もある。

2-4. ロス・マルティネス

マナグア市の北西に位置する(図 2)ロス・マルティネス遺跡(Los Martínez)では、2010 年、住宅地の拡張にともなう緊急発掘調査が行われた。約 800 平方メートルにわたり、60 の試掘坑が掘られ、さまざまな遺構と、約 3 万点の土器片、石器が回収された。以下報告書

(Zambrana 2012)から調査結果を概観する。

土器は、テンピスケ期(400BC-AD300)の指標となるウスルタンがほぼ全ての試掘坑で出土している一方、バガセス期の土器は皆無、サポア期以降の土器が再び出土する。興味深いことに、テンピスケ期の遺構は共伴する土器や石器から人間居住に関わるもの(住居基礎、石畳など)であるが、サポア期の遺構は全て、石郭墓(写真 7)、甕棺あるいは直葬と副葬土器の組み合わせからなる埋葬である(Zambrana 2012: 101-102)。この遺跡では、獣骨や魚骨などの動物遺存体は見つかっていない。ただし、調査が開始された時点で、すでに約 40 センチの深さまでまで工事機械により表土がはぎ取られており、調査者は動物遺存体を含む遺物包含層が、調査前にすでに除去されていた可能性にも言及している(Zambrana 2012: 103)



写真7 ロス・マルティネス遺跡
石郭墓

2-5. ネハバ

ネハバ遺跡(Nejapa)はマナグア市に所在し、マナグア湖岸から南へ約 5 キロの距離にある(図 2)。ネハバ湖という小さな湖にほど近い。12 のマウンドが確認されており、そのうちの 2 つが 2007 年から 2013 年まで、ニカラグア国立自治大学(UNAN)が学生の実習をかねて発

掘調査された (Balladares y Lechado 2013)。これらは、「マウンド 1」と「マウンド 5」と名付けられ、それぞれ直径 12.4 メートル、10.1 メートルであり、玄武岩などの平石を土留め壁として外周に並べ、その中に詰め土を行う工法で建築されている。マウンド 5 では、上下に重なる 2 層の床面が検出された。回収された土器片からは、バガセス期からオメテペ期のものが確認されている (Balladares y Lechado 2013: 37-39)。動植物の遺存体や炉と思われる焼け跡が見つかっており、このマウンドは住居の土台であると考えられる。

2-6. ラス・デリシアス

ラス・デリシアス遺跡 (Las Delicias) はマナグア市北東部にある (図 2)。ここも住宅地の造成に伴い緊急発掘された。トレンチ発掘、平面発掘および試掘坑により、計 490 平方メートルが発掘され、50 の埋葬が出土した。報告によれば、これらは全てテンピスケ期に属するものであり、一次埋葬と二次埋葬がある。全ての埋葬に土器が伴っており、ボカーナ刻文土器と呼ばれるテンピスケ期に特徴的な土器が圧倒的多数を占める。バガセス期の土器も出土するが (101 点)、土器型式を同定できた全出土破片数 (5704 点) の 2 パーセントに満たない (Alcaldía de Managua 2010: 38)

また、この遺跡では魚骨が多く出土する。カメの甲羅、アライグマの骨なども出土し、マナグア湖の水産資源を初めとした動物性タンパクが摂取されていたことが分かる。埋葬遺跡であると同時に、生活廃棄物も多く出土し (Alcaldía de Managua 2010: 33)、居住区域と埋葬区域が近接あるいは未分離であったこと

がうかがえる。

3. 1990 年代までのマナグア湖畔での考古学調査結果との比較

3-1. マナグア首都考古学プロジェクト

過去のマナグア湖周辺の広範囲な考古学調査としては、1995-97 年に行われたマナグア首都考古学プロジェクトがある。ニカラグア文化庁と米国コロラド大学が共同で、開発工事による破壊の危機に瀕したいくつかの遺跡を調査してデータを収集した (Lange 1995; Lange 1996)。筆者は 1997 年にこのプロジェクトに参加し、自身が発掘調査したティコモ遺跡 (Sitio Ticomo) を含め、発掘調査された 4 つの遺跡を比較して、AD800 頃とされるバガセス期からサポア期への移行について考察した (Hasegawa 1998; 長谷川 1999)。以下この考察について振り返る。

端的に言うと、当時発掘が行われていたマナグア市内の遺跡でバガセス期からサポア期への連続的かつ稠密な居住があると認められる遺跡はなかった。上記の 1990 年代に調査された 4 つの遺跡のうち、2 つの遺跡、ティコモ、アカワリンカ (Acahualinca) ではバガセス期の土器が多く出土し、サポア期に入ると土器の出土量が激減する。残り 2 つの遺跡、ロス・プラセーレス (Los Placeres)、UNI : 国立工業大学構内遺跡 (Universidad Nacional de Ingeniería) では全く逆のパターンが見られ、バガセス期にはわずかし土器が出土しないが、サポア期に入ると出土量が急増して、オメテペ期まで続く (遺跡の所在地については図 2 参照)。そして、それらの相反する土器の出土パターン

を示す遺跡の間には、地理的・環境的な違いは認められない。これに、その他の表面調査が行われた遺跡のデータや近隣地域での調査結果を加味して検討を行った。結果、あくまでも土器の出土量だけから得られた結論ではあるが、バガセス期からサポア期への移行時に、マナグア湖畔ではいくつかの居住地が放棄されるとともに新しい居住地が営まれるという変化が起こったと結論づけた(長谷川 1999: 70)。

この変化は、生態学的な環境や生業の変化などにより人々が新しい環境帯へと移動した結果には見えない。植民地時代のヨーロッパ人が書き残した史料には、ニカラグア太平洋岸に住む先住民の起源について述べているものがあるが(Torquemada cited by Esgueva 1996: 26-28 など)、それらによれば、ニカラグア太平洋岸の住民、すなわちオトマンゲ語族のチョロテガとユト・アステカ語族のニカラオは、もともと北のメキシコに居住しており、いつの時代にか南下してこの地に到来し、住み着いたという。ここで取り上げた、マナグア湖周辺におけるバガセス期からサポア期への移行時のいく

つかの居住地の放棄と新しい居住地の建設は、この北からの移民によって引き起こされたと考えられる。P.ヒーリーは、ニカラグア南部のリバス地峡で調査を行った結果から、やはりAD800 頃に新しい土器型式が出現し、これが北からの移住者によってもたらされたことを指摘している(Healy 1980: 336-337)。

3-2. データの統合

1990 年代までのマナグア首都考古学プロジェクトによって導かれていた上記の図式に、近年発掘調査されたチラマティーヨ、ラ・パス、オロ・ベルデ、ロス・マルティネス、ネハパ、ラス・デリシアスの各遺跡のデータを加えるとどのようなようになるであろうか(表 1)。

まず、テンピスケ期には、ラス・デリシアスとロス・マルティネスの 2 つの遺跡で人間活動の痕跡が濃厚である。前者は居住地、後者は居住地と埋葬地を兼ねていると思われる。

続くバガセス期には双方の遺跡ともに人間活動の痕跡が見られず、ティコモ、アカワリンカ、ネハパの 3 つの遺跡で多くの土器が出土す

	テンピスケ期 (500BC-AD300)	バガセス期 (AD300-800)	サポア期 (AD800-1350)	オメテペ期 (AD1350-1550)
ラス・デリシアス				
ロス・マルティネス				
ティコモ				
アカワリンカ				
ネハパ				
オロ・ベルデ		???		
UNI				
ロス・ブラセーレス				
チラマティーヨ				
ラ・パス				

居住その他、人間活動の顕著な形跡

表1 マナグア湖畔の遺跡の居住シークエンス

る。オロ・ベルデでは土器はサポア期以降のものに限られるが、埋葬様式や層位から見ると1体以上の埋葬人骨がバガセス期に属する可能性がある。

サポア期に入ると、大きな変化が起こる。このバガセス期からサポア期への移行が、チョロテガの移住とそれによる新しい土器型式の導入によって規定されるというのが従来の図式である。ティコモ、アカワリンカでは人間活動の痕跡は希薄になり、代わってチラマティーヨ、ラ・パス、UNI、ロス・プラセーレスの4つの遺跡で土器が急激に増加する。また、ロス・マルティネスでは、バガセス期の断絶の後、埋葬という形で再度土器が出土し始める。オロ・ベルデでも、この時期に大規模な集団墓が現れる。ただし、上記のように前時代からこの地に埋葬がなされていた可能性がある。ネハパ遺跡は、唯一バガセス期からサポア期にかけて、確実に連続した居住が認められる遺跡である。

続く画期であるオメテペ期の開始であるが、従来の図式では、ニカラオの到来と彼らがもたらした一連の土器の出現がこの変化を規定するとされる。そして、オメテペ期にはいってもサポア期に土器が出土したすべての遺跡で継続して土器が出土する。この時期に断絶する遺跡も、この時期に新たに土器が出始める遺跡もない。

このような推移に加え、自身が発掘したチラマティーヨ遺跡の調査結果については、さらに詳述すべきことがあるが、ここでひとまず、ニカラグアのもう一つの大きな淡水湖であるニカラグア湖の周辺で行われた考古学調査について概観し、その結果あきらかになった問題点に言及する。

4. ニカラグア湖畔の考古学調査

2000年代に入り、カラグア湖の周辺にある3つの遺跡で発掘調査が行われた。その結果、メソアメリカ系民族集団のニカラグア太平洋岸への移住に関する従来の図式に、深刻な疑問が投げかけられた。

発掘されたのは、リバス県のサンタ・イサベル遺跡(Santa Isabel)、グラナダ県のテペタテ遺跡(Tepetate)、エル・ラヨ遺跡(El Rayo)である(遺跡の所在地については図2参照)。

サンタ・イサベルは、土器から見て先スペイン期の最後の時期であるオメテペ期の遺跡であり、スペイン人到来時にリバス地峡に居住したニカラオの中心的な居住地であったカウカポルカ(Quauhcapolca)であると考えられた。ニカラオの移住と、それによる当該地域のメソアメリカ化のプロセスを明らかにする目的でカルガリー大学の調査団が発掘調査を行ったが、その結果は事前の予想に反するものだった(McCafferty and Steinbrenner 2005)。

まず、採集された炭化物の放射性炭素(C14)年代測定から12の年代が得られた。ところが、そこから見ると、この遺跡に人間居住があったのはAD890-1280である。つまり、スペイン人到来直前のオメテペ期を規定するとされた土器型式は、実は、かなり古い土器のものであったのである。

さらに、土器の図像には、「羽毛の生えたヘビ(Quetzal Coatli)」や「風の神(Ehecatli)」など、確かに北のメキシコ、つまりメソアメリカの各地域と共通するものが見られる反面、その他の遺物にはメソアメリカの文化要素とされるものはほとんどなかった。建築は、切石積み

の石造プラットフォームではなく、日干しレンガや木舞壁造りの質素なものである。黒曜石の石器も出土せず、祭祀に用いられる香炉も出土しない。調理に用いられた石皿や石棒からはメソアメリカの主食であるトウモロコシの痕跡は検出されず、その代わりに湖の水産資源（魚貝類）、野生動物、豆、ヤシが多く消費されていたことが分かった。

グラナダ県のテペタテ遺跡とエル・ラヨ遺跡も、先スペイン期の最終時期であるオメテペ期の居住地であると考えられており、カルガリー大学によって発掘調査が行われた。これらの遺跡でも上記サンタ・イサベルと同じような事実が判明する。テペタテでは二つの C14 年代測定から AD1030±40 と AD1140±40 という年代が得られ、エル・ラヨでも C14 年代測定からは AD1100-1150 頃までしか人間活動が続いていないことが分かった (McCafferty 2010: 4)。なお、エル・ラヨではバガセス期からオメテペ期までの土器が出土しており、土器型式や埋葬様式の変化で規定されるバガセス期からサポア期への移行は AD750-850 頃、サポア期からオメテペ期への移行の年代は不明であるとされる。さらに、トウモロコシの栽培と消費を示す植物遺存体や調理用具、儀礼用品としての土偶、メソアメリカ的な切石積みの建築といった要素は欠落しているか、ごくわずかであった。

要約すると、従来は絶対年代で AD1350-1550 と考えられていたオメテペ期の代表的な土器は、実際には AD1200 以前のものである可能性が高い。チョロテガやニカラオといった民族集団が北から到来した後とされる時期になっても、ニカラグア湖周辺ではメソアメリカ的な文化要素は非常に希薄であり、はっきりそれと認

識できるものは土器に描かれた図像くらいである。

この結果、言語学やエスノヒストリーから導き出される結論と、考古学資料の間に重大な齟齬が生じることになった。これに鑑みて、ニカラグア湖周辺の 3 遺跡を調査したマカフェルティは、メキシコからの直接的な移民が到来したのではなく、ホンジュラスやエルサルバドルが移民たちの故郷であり、より「間接的な」形態の移住が起こったのではないかと示唆する (McCafferty 2010: 11)。

5. 考察

ここでは、前章で紹介した近年のニカラグア考古学での問題点を踏まえた上で、最近のマナグア湖周辺の調査結果を検討する。また、ここでは筆者が関心を持つサポア期からオメテペ期にかけての問題にのみ言及し、それ以前の時期については割愛する。

5-1. 編年上の問題

筆者がマナグア湖周辺で現地調査を開始した目的は、編年の問題を解決することである。サンタ・イサベルなどの調査で明らかになったように、従来 AD1350-1550 というスペイン人到来直前のものとされたオメテペ期の代表的な土器が、実は AD1200 以前のサポア期の土器であるとすれば、土器編年に空白が生じてしまうことになる。真にスペイン人到来直前の土器を突き止めることによってこの空白を埋め、「ほんとうの」オメテペ期の遺跡を特定することが急務である。それにより、チョロテガ、ニカラオという民族集団の移住とニカラグア太

平洋岸のメソアメリカ化というニカラグア先スペイン期の文化史における一大事件をよりよく理解できるようになるであろう。

ネハバ遺跡では、調査者らがマウンド5の発掘において上下に重なる二枚の床面を発見している。遺物包含層が薄く、しかも層位がはっきりしないことが多いニカラグア太平洋岸の遺跡では床面の重なりを検出できることは珍

しい。表2は、この二つの床面からの土器の出土状況である。ちなみに「トレンチ」は、マウンド5ともう一つのマウンドの関係を探るために両者の間を掘ったもので、ここからマウンド5に居住していた人々がゴミ捨て場として掘ったと思われる土坑が見つかり、土器片などの遺物が出土している。

	バガセス期		サポア期		・オメテベ期			計
	ボルゴニャ	レオン	サカサ	ハバカヨ	バジェホ	カステイヨ	コンボ	
UE3(最終居住面)	4	10	16	6	9	2	4	51
UE6(古い居住面)	2	7	7	3	11	0	1	31
トレンチ	3	5	6	2	3	0	0	19
	9	22	29	11	23	2	5	101

表2 ネハバ遺跡の土器出土状況(Balladares and Lechado 2013, p.38 Grafico 8より作成)

調査者であるバジャダーレスとレチャードは、土器の出土状況を報告するのみで何ら解釈を述べていないが(Balladares y Lechado 2013: 37-40)、この報告は興味深い事実を示している。これを見ると、バガセス期の土器が最終居住面でも出土しており、床面を張るときの詰め土に以前の時代に廃棄された土器片が混じっていたと推測される。ただ、注目すべきは、コンボ・コランダーとカステイヨ刻文土器という二つの土器型式の出土がほぼ最終居住面からに限られることである。

カステイヨ刻文土器は、短頸壺、無頸壺の器形で、表面が研磨された暗褐色の土器である(写真8)。頸部に幾何学文、連続した三角形、平行線などの細い刻文が刻まれている。コンボ・コランダーは、口縁部が同定できておらず

器形は不詳であるが、胴部から底部にかけて細かい貫通孔が多くある土器であり、漉し器、ざるとして使用したとみられる(写真9)。確認できる器形としては短頸壺がある。



写真8 カステイヨ刻文土器



図9 コンボ・コランダー

ネハバ遺跡での出土状況は、これら二つの型式の土器が最終居住面である床面を造った時点から後の時期にのみ製作・使用・廃棄されたことを示唆している。実際、1960年代にオメテペ島で調査を行ったハバーランドは、カスティーヨ刻文土器と、それとよく似たラゴ黒色土器は最終段階で出土し、前時代までの土器型式

とは様式的に隔絶していると述べている(Haberland 1992: 110-111)。ハバーランドはさらに、これらの土器の製作開始は、「新しい民族の到来か、そうでなければ土器製作についての新しいアイデアの伝播」とまで言い切る。ただし彼は、新しい民族が到来したとすれば、それはニカラオではなく、南に起源を持つ人々ではないかと推測している(Haberland 1992: 116)。

つまり、前述のようにオメテペ期とされる土器が実際は AD1350-1550 よりもずっと古い年代であると考えられるなかで、これらの土器は「真に」オメテペ期の土器、つまりスペイン人到来直前の時期の土器である可能性を有している。

	・サポア期			・オメテペ期								
	サカサ	ババカヨ	ベレン	パタキ	バジェホ	カスティ	ラゴ	コンボ	オメテ	赤色	刺突文	
1層	6	0	0	0	2	0	0	0	0	11	5	
2層	47	14	1	1	52	0	17	1	2	66	17	
3層	93	22	0	1	97	0	86	7	7	77	21	
4層	46	24	0	0	83	6	91	12	8	62	18	
5層	1	7	0	2	42	0	5	1	0	2	0	
6層	41	52	0	1	106	3	132	4	2	68	0	
7層	32	42	0	5	56	1	55	5	0	42	0	
8層	28	21	0	0	54	0	53	11	0	23	2	
9層	3	29	0	0	11	0	18	2	0	32	0	
	297	211	1	10	503	10	457	43	19	383	63	

表3 チラマティーヨ遺跡土器出土状況
(サポア期とオメテペ期の土器のみ示す)

この仮説を検証すべく、チラマティーヨ遺跡で試掘坑を発掘して、土器の出土状況を検討した。その結果が表3である。結論からいうと、カスティーヨ刻文土器、ラゴ黒色土器、コンボ・コランダーともに、AD1200以前まで年代が引き上げられたその他のオメテペ期の土器型式とまったく同じように出土している。少な

くともこの発掘調査からは、これら三つの土器が他の「オメテペ期」とされる土器よりも年代的に新しいという確証は得られなかった。

ただし、この出土状況から見ると、刺突文土器(英語: Punctuated、西語: Puntuado)と暫定的に名付けて分類した土器は上層でのみ出土していることが注目される。これは、頸部に

刺突文を巡らせた粗成土器であり、いまだ土器型式としては確立されていない。器形は短頸壺が多いようである(写真 10)。



写真10 チラマティーヨ出土、刺突文土器

チラマティーヨ遺跡の試掘坑の発掘では、明確に床面と思われるような層は検出されなかった。できる限り土質の変化を追いかけて9層にわたる分層を行ったが、発掘時の印象では、攪乱された堆積であるとの疑いを否定できなかった。よって、上層から下層まで各層に含まれる土器型式が均質になっていることは攪乱されたため堆積物が完全に混じり合ってしまった結果であるとも考えられる。他方、刺突文土器がほぼ4層から上の層でしか出土しないという事実にも注意を払うべきであり、この土器が他の土器型式に比べて新しい時代の土器である、つまり真にオメテペ期の土器であり、スペイン人到来直前の時代の標識遺物となる可能性もある。この試掘坑の第6層と第8層から出土した炭化物の放射性炭素(C14)年代が現在測定作業中である。

仮に、チラマティーヨ遺跡の堆積が攪乱されていない一次堆積であり、土器型式の年代を正確に反映しているとどうなるだろうか。結論は、サボア期の土器とオメテペ期の土器は、やはり

ほとんど時期差が無いというニカラグア湖畔の遺跡の調査を裏書きすることになる。サボア期の土器とオメテペ期の各土器型式は、下層から上層まで、各層でほとんど同じように出土している。また、オロ・ベルデでは、サボア期の土器とされるサカサ刷毛目文土器の甕棺に、オメテペ期の代表的な彩色土器とされるバジェホ多彩色土器が共伴しているという例がある。両者が年代的に完全に並行しているかどうかはともかく、かなりの期間にわたり同時に製作・使用されていたことは確かであろう。

5-2. メソアメリカ東南辺境としてのマナグア湖畔

土器の問題は以上のようなものであるが、その他の出土遺構や遺物について検討する。チラマティーヨ遺跡では、大量の石器が出土している。石材については多様であることは上述の通りだが、その中でメソアメリカ的な要素である黒曜石製石器が非常に少ないことは注目される。未だ詳細に分析はなされていないが、発掘の過程で目についたものは非常に小さな剥片が3点のみであった。同じく筆者が発掘したラ・パスでも、未だ発掘面積が小さいとはいえ、1点の小破片のみの出土にとどまる。ネハパでは、打製石器の石材としては玄武岩について黒曜石が上げられているが、数量は記されていない(Valladares and Rechado 2013: 36)。また、ロス・マルティネスでは、筆者が行った発掘よりも遥かに広範囲な発掘を行っているにもかかわらず、出土総数は10点にとどまる(Zambrana 2012: 105-109)。それらはすべて、ごく小さな破片・剥片であり、石刃やその破片は見られなかったという(J. Zambrana 私信)。

マナグア湖畔の諸遺跡での調査結果は、ニカラグア湖畔の遺跡で指摘された傾向と一致しているように見える。テペタテでは黒曜石製石器が出土総数の 8 パーセントを占めたものの、サンタ・イサベルとエル・ラヨでは、1 パーセントにとどまる (McCafferty 2010: 9)。

建築についても検討したい。チラマティーヨ遺跡では建築の痕跡は全く確認できず、ラ・パスでは、高さ約 3 メートルのマウンドがあるものの、内部の建築構造は自然石を積み上げて土留め壁を造っただけのものである。ネハパ遺跡のマウンドは、やはり自然石を用いて住居の基壇としたもので、高くても 1 メートル程度である。そもそもネハパ遺跡のマウンドは円形であり、それに対して、メソアメリカにおける建物は方形のプランを持つ。ロス・マルティネス遺跡では、ここで問題とするサポア期とオメテペ期の建造物は見つかっておらず、オロ・ベルデでも発見されているのは埋葬のみである。

マナグア湖畔の諸遺跡でメソアメリカの神殿ピラミッドのような切石積みの建造物が見つからないという状況は、ニカラグア湖畔も同様である。上記のように、サンタ・イサベルでマウンドが発掘された結果、アドベ(日干しレンガ)とバハレケ(木舞壁)が建築に用いられていたことが判明した (McCafferty and Steinbrenner 2005: 137)。調査者は、この遺跡のマウンドは古い建造物のがれきの上に新しい建造物を建築することによって堆積したものであり、メソアメリカで通常マウンドと呼ばれる土留め壁と詰め土の建造物が崩れたものではないとしている (McCafferty 2010: 6)。

唯一いくぶんでもメソアメリカ的ともいえる建築として挙げることができるのは、エル・ラ

ヨ遺跡の幅 1 メートルの石壁と 1×2 メートルの石造建造物である。前者は基壇の土留め壁であると考えられるが、壁の石に挟まった土器から見るとバガセス期のものである。後者は、近接するサポア期の埋葬と関連する遺構であると推測されるという (McCafferty 2010: 6)。

現在までの結論としては、ニカラグア湖畔の遺跡でも、マナグア湖畔の遺跡でも、メソアメリカ的な建築はほぼ見られない。この点に関しては、16 世紀の年代記作者もその著述の中で「泥と木材と植物の茎で造り、わらで覆われている」と述べているとおりであり (Oviedo 1976: 363 など)、考古学資料と合致している。

食生活を復元するための遺物についてはどうであろうか。ニカラグア湖畔の遺跡の調査では、メソアメリカの主食であるトウモロコシの痕跡が見つからないことはすでに述べたとおりである。それを最も端的に示しているのが、トルティーヤ(トウモロコシのパン)を焼くためのコマル(*comal*)と呼ばれる土製フライパンあるいは大皿の欠如であり (McCafferty and Steinbrenner 2005: 144)、これはニカラオやチヨロテガなどメソアメリカ系民族集団の故郷とされるメキシコでは頻繁に遺跡から発見される。また、有機土壌や調理具と見られる石器に付着した残存物のプラント・オパール分析でも、トウモロコシの痕跡は発見されなかった (McCafferty 2010: 5)。

筆者が行った二つの発掘調査でも、コマルと思われる土器片は皆無であり、マナグア湖畔の他の遺跡でも報告例はない。トウモロコシを初めとした植物の調理に用いられる石皿や石棒についてはどうであろうか。チラマティーヨ遺跡では、石器の詳細な分析は未だなされてい

い。石皿の破片と思われる大型の磨製石器も現在分かっている限りでは1点だけ出土しているが、圧倒的多数の石器は尖頭器を含む打製石器である。マナグア湖畔で、出土した石器の器種組成が報告されている唯一の遺跡はネハパである。これを見ると、計47点出土した石器のうち大型磨製石器は3点である(Balladares y Lechado 2013: 36, Grafico. 5)。これを少ないとみるかどうかは判断が分かれる。いずれにせよ、このネハパ遺跡も含めて、マナグア湖畔の遺跡の場合、花粉分析やプラント・オパール分析は行われていない。よって、トウモロコシの欠如という現象を直接的に指摘することはできず、コマルの欠如が間接的にそれを示唆しているに過ぎない。

生業あるいは食生活に関連する遺物としては、チラマティーヨ遺跡で発見された両側に挟りが入った大量の土器片が注目される。これらは漁労の際に釣り糸や網に付ける錘として用いられたと推測される。同遺跡では魚骨も出土しており、この地に住んだ人々が湖の水産資源に大きく依存しながら生活していたことがうかがえる。魚骨はネハパ遺跡でも出土している(Balladares y Lechado 2013: 36)。オロ・ベルデとロス・マルティネスでは、埋葬地という遺跡の性格上、魚骨を初めとした動物遺存体は発見されていない。ただ、ラス・デリシアスは居住地と埋葬地という両方の性格を併せ持つ遺跡であり、ここでも魚骨は大量に発見されている。ラス・デリシアスは、ここで問題にしているサポア期・オメテペ期ではなく、それより遥かに古いテンピスケ期の遺跡であるが、マナグア湖畔に住む人々が古くから湖の水産資源を活用していたことを示している。

ニカラグア湖畔の遺跡でもこの傾向は同じである(McCafferty 2010: 4-5)。サンタ・イサベルでも、エル・ラヨでも魚骨は大量に出土しており、釣り針、漁網につける土製の錘も出土が確認されている。サンタ・イサベルでは、シカの骨をはじめアルマジロ、各種鳥類とは虫類の動物遺存体も多く出土しており、狩猟・漁労が盛んであったことがうかがわれる。

トウモロコシ農耕民というメソアメリカ系民族集団のイメージとは裏腹に、マナグア湖畔に住み着いた人々は、チラマティーヨ遺跡に見られるように、湖からとれる食料に大きく依存しながら、石材の交易や石器の製作を営んでいたという心象を持つ。その立地からして、石材の交易もやはり湖を通して行われていたのだろう。チラマティーヨ遺跡に見られる石材は多様であり、そのすべてを近隣の露頭などから得たとは思えない。そして、その中に黒曜石がほとんど含まれないことから、彼らの交易網が北のホンジュラスやグアテマラ、つまりメソアメリカ中心部までは延びていなかったことがうかがえるのである。

5-3. 多様性

本稿では、近年調査が行われた、あるいは調査が継続中であるマナグア湖畔の遺跡について網羅的に概観してきた。いまだその数は少なく、結論を得るにはデータが少ないが、現在までに得られた知見にもう一つ付け加えるとすると、マナグア湖畔の遺跡には多様性が見られるということである。

建築の面からいえば、高さ3メートル近く、おそらく埋葬あるいは祭祀用の公共建造物たるマウンドを有するラ・パス遺跡、それよりは

かなり小規模な円形の住居基壇が多数見られるネハバ遺跡がある。その一方で、チラマティーヨでは、土器その他の生活廃棄物からは人間活動の濃厚な痕跡が認められるにもかかわらず、試掘からも、その周辺の地表面の観察からも建築活動の痕跡は全く確認されなかった。おそらくは、有機質の材料で簡素な建造物を営んでいたと思われる。

ロス・マルティネスでは、建築と呼べそうなものは石郭墓が出土したのみである。この遺跡の居住区画は離れたところにあったと考えられ、その様態については未だ不明である。オロ・ベルデ遺跡でも、発見されたのは集団墓だけである。この埋葬を営んだ人々の居住区に生活用の建造物が存在するとすれば、やはり、それはすでに発掘された場所からは離れているのであろう。ただし、オロ・ベルデの埋葬で、サポア期以降と確定したものはすべて甕棺墓であるのに対して、ロス・マルティネスでは、石郭墓、甕棺墓、直葬と3種類の形態が認められる。

このようにマナグア湖畔のサポア期からオメテペ期の遺跡で見られる考古学的文化に大きな多様性があるという心象が果たして正しいかどうか、またそのような多様性が存在するとして、その多様性はこの地で活動を行った先スペイン期の人々の文化的アイデンティティをどの程度反映しているのかは、今後の調査の進展を待たなければならない。

6. 結論と今後の展望

チョロテガとニカラオという、スペイン人到来時にニカラグア太平洋岸に居住していた民族は、いつ頃、どのようにしてこの地に移住し

て、居住を確立したのか。2000年代からのニカラグア湖畔の遺跡の調査では、AD800頃から始まるサポア期を規定する土器がチョロテガによってもたらされたものであり、AD1350頃に始まるオメテペ期を規定する土器が、遅れて到着したニカラオによってもたらされたとする従来の定説にたいして強烈な反論が投げかけられた。本稿で取り上げたマナグア湖畔の考古学調査の結果からは、この反論が的を射ているものであると結論づけられる。筆者が行ったチラマティーヨ遺跡の発掘調査からも、その他のマナグア湖畔における遺跡の発掘調査の結果からも、サポア期の土器とオメテペ期の土器のあいだには、層位的つまり時間的な前後関係は認められない。もしも、「サポア期の土器＝チョロテガ、オメテペ期の土器＝ニカラオ」という図式が正しければ、これらの二つの民族集団はほぼ同時か、あるいは短い間隔を置いただけで相前後してニカラグア太平洋岸へと移住したと考えられる。

AD800頃とされるバガセス期からサポア期への移行時、あるいはそれから程なくしてニカラオがニカラグア太平洋岸に到来したとして、彼らはなぜそこでスペイン人到来までの700年近くを過ごし、さらに南へと移住しなかったのだろうか。そもそも、なぜニカラオはニカラグア太平洋岸にやってきたのだろうか。

ニカラオはユト・アステカ語族に属する。アメリカ大陸の先住民言語が非常に多様であり、各言語が狭い範囲の分布を示すことはつとに知られている。ユーラシア大陸のインド・ヨーロッパ語族やシナ・チベット語属のような広大な範囲に広がる言語はなかった。このことは、各地の民族集団が比較的孤立して、その居住地

域からあまり移動しなかったことの証左ととれる。そのようななか、ユト・アステカ語族は、メキシコ北方の乾燥地帯からメソアメリカに侵入してメキシコ中央高原にアステカ王国を打ち立て、その分派のニカラオはメソアメリカを突き抜けて、ニカラグア太平洋岸にまで達した。アメリカ大陸では例外的に広範囲に分布する語族を形成している。

ユト・アステカ語族の南下が、なぜニカラグア太平洋まで及んだのか、そしてなぜそこで止まったのかは簡単に答えが出せる問ではない。ただし、なぜそれ以上南下しなかったかという問いについては、一つの見通しを示すことができるだろう。

本稿で紹介した「オメテペ期」の遺跡が、真にニカラオによって居住されたものであるとするならば、発掘調査から見えてくる彼らの生活様式は、故郷である北のメソアメリカとは著しく異なるものである。特に建築や食生活にその違いが顕著であり、北のメソアメリカ中心部との交易の指標となる黒曜石もまれである。異なる環境帯に適応しながらの移住に時間を要し、遠く離れるにつれ、故郷との結びつきも薄れていったのだろうか。

先スペイン期アメリカ大陸の文化史におけるこの重大な出来事を解明するために、マナグア湖畔でさらなる調査と土器編年の修正、そして生態学的な視点からの研究を行うことが求められている。

引用文献

外務省

2016 「ニカラグア共和国 (Republic of Nicaragua) 基礎データ」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nicaragua/data.html#section1>

長谷川悦夫

1999 「先コロンブス期のマナグア湖畔ーチヨロテガの移住にかんする諸問題」『古代アメリカ』2:59-82 古代アメリカ研究会

Abel-Vidor, Suzanne

1981 *Ethnohistorical Approach to the Archaeology of Greater Nicoya, In Between Continents/ Between Seas: Precolumbian Arts of Costa Rica*. E. P. Benson editor, pp.85-92. Harry A. Abraams, Inc., New York.

Alcaldía de Managua, Dirección de cultura y patrimonio histórico municipal

2010 *Las Delicias - Poblado Indígena más antiguo de Managua*. "Nuestra identidad - rescate histórico de Managua".

Balladares, Sagrario y Leonardo Lechado

2013 *Investigaciones arqueológicas Comarca Nejapa, Informe Técnico*. CADI. Departamento de Historia, Universidad Nacional Autónoma de Nicaragua, Managua.

Esgueva, Antonio

1996 *La Mesoamérica Nicaraguense: Documentos y Comentarios*. Universidad Centroamericana, Managua.

Fowler, William

1989 *The Cultural Evolution of Ancient Nahua Civilizations: The Pipil – Nicaraos of Central America*. University of Oklahoma

Haberland, Wolfgang

1992 *The Culture History of Ometepe Island: Preliminary Sketch (Survey and Excavations, 1962-1963)*.

In *The Archaeology of Pacific Nicaragua*. Frederick Lange et. al. editors, pp. 63-117. University of New Mexico Press.

Hasegawa, Etsuo

1998 Informe de las investigaciones arqueológicas en el sitio Ticomo, Managua, Nicaragua. Archivo: Instituto Nicaraguense de Cultura, Managua.

2015 Informe de las investigaciones en el sitio Chilamatillo (N-MA-8-100), Municipio de Tipitapa, Departamento de Managua, Nicaragua. Archivo: Instituto Nicaraguense de Cultura, Managua.

Healy, Paul

1980 *Archaeology of the Rivas Region, Nicaragua*. Winifred Laurier University Press, Ontario, Canada.

HKND Group

2015 Noticia de la Empresa: HKND Group entrega un gran número de piezas arqueológicas al Gobierno de Nicaragua: 2015.02.09 (<http://hknd-group.com/portal.php?mod=view&aid=167>)

Lange, Frederick editor.

1995 *Descubriendo las Huellas de Nuestros Antepasados. El Proyecto "Arqueología de Zona Metropolitana de Managua"*. Alcaldía de Managua, Nicaragua.

1996 *Abundante Cooperación Vecinal, La segunda temporada del Proyecto Arqueológico de la Zona Metropolitana de Managua*. Alcaldía de Managua, Nicaragua.

Lothrop, Samuel K.

1926 *Pottery of Costa Rica and Nicaragua*. 2 vols. Museum of American Indian, Heye Foundation Contribution 8.

McCafferty, Geoffery

2010 Ten Years of Nicaraguan Archaeology. Paper prepared for the 2010 Meeting of the Society for American

Archaeology. Sacramento, CA.

McCafferty, Geoffery and Larry Steinbrenner

2005 Chronological Implications for Greater Nicoya from the Santa Isabel Project, Nicaragua. *Ancient Mesoamerica*, 16: 131-146.

Newson, Linda

1987 *Indian Survival in Colonial Nicaragua*. University of Oklahoma Press.

Oviedo, Gonzalo Fernández de

1976 *Historia general y natural de las Indias*. En *Los Cronistas de Indias*, Serie de Crónicas No. 3, Colección Cultural del Banco de América, Managua.

Squier, Epharaim

1852[1989] *Nicaragua: Its People and Scenery, Monuments and the Proposed Interoceanic Canal*. D. Appleton & Co., New York. (*Nicaragua: su gente y paisajes*. traducido por L. Cuadra, Nueva Nicaragua Editorial, Managua.)

Zambrana, Jorge

2012 Estudios Arqueológicos en el sitio Los Martínez, Sector el Pantanal-Managua. Archivo: Alcaldía de Managua.

Zambrana, Orvin

2013 Excavaciones arqueológicas Ciudad Sandino - Oro Verde - Zona 7. Archivo: Alcaldía de Ciudad Sandino.